

十勝管内の2017年産農畜産物が、収量を示す総重量で460万9300トンと16年から25%増えた。集計を始めた13年以降で最大。豆類や野菜の伸びが目立つ。昨年は管内24JAの取扱高が3388億円と15年の過去最高額を更新したが、総重量も15年を約20万トン上回った。昨年の十勝農業が記録的な豊作だったことが改めて裏付けられた。

過去5年で最大



豆類は16年産が不作だったこともあり、17年は重量の伸び率が9割増と高くなった（小豆の「エリモショウズ」の収穫作業）

ホクレン帯広支所が、管内JAの取り扱い分に加えて商社経由などの数字も推計し、総重量を算出した。商社などを含まないJA取扱高とは集計対象が異なる。ビートや生乳といった重い品目が豊作になると総重量も大きくなりやすい。

■耕種（畑作）部門

ビート184万トン 野菜は豊作貧乏

昨年は耕種全体で16年比38%増の336万7000トンだった。15年と比べても約20万トン多い。金額ベースのJA取扱高が1392億円と15年実績にわずかに届かなかったのに対し、品目別の重量で最大のビート（183万9500トン）の豊作が全体を押し上げた。

雑穀・豆類が8万5400トンと90%増だった。開花時期に当たる7月の日照時間や気温が豆類に適したものとなり、特に小豆やインゲン豆の収量が増えた。

16年は台風による被害が大きく、収量が落ち込んでいたことも17年の重量ベースの伸び率を高めた。

野菜も伸び率が大きく、50%増の34万7700トン。もっとも、金額ベースのJA取扱高は5%減の195億円だった。ニンジンやダイコンが全国的に豊作で取引価格が下落。豊作貧乏となった農家は多かった。

野菜のうち、収量、単価がそろって上向いたのがナガイモ。管内は青森県と並ぶ主産地で、ここ数年は輸出にも力を入れている。豊作でも輸出拡大によって国内の供給過多を回避しやすくなっている面がある。

ジャガイモは25%増の87万7100トン。16年産の不作でポテトチップスが全国で品不足となる「ポテチ騒動」を招いたが、昨年産は持ち直した。JA取扱高は16%増だったので、収量ほど金額は伸びなかった。

ビートと麦類はそろって4割強の伸び。ビートは秋口に寒暖差が大きくなって糖度も高まった。小麦も品質、収量とも良かった。

■畜産部門

生乳は115万トン 年前半の不振響く

生乳の重量は114万8600トンと16年比で1%減少となった。16年台風で牧草などの生育が悪くなり、17年前半は乳用牛に十分な栄養を与えられない酪農家が多かった。出来が良かった今年産の牧草に切り替わった秋以降、乳量が回復したものの、年前半の不振をカバーしきれなかった。

ただ、17年度はチーズ向けなどの乳価が引き上げられた。このため金額ベースのJA取扱高では、1042億円と1%増だった。

肉用牛や豚など（個体販売を含む）は2%減の9万3500トン。JA取扱高では肉用牛で微減、豚・鶏は横ばいだった。

